

子どもの名前：		ID 番号	
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害が障害なし
深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている	かなりの または持続する障害	問題視されるべきこと の存在 または心痛	機能に障害はない
(30)	(20)	(10)	(0)
自傷行為	142 事故ではないことで、 自分を傷つけたことがある (死のうという気持ちから おこなったことなど)	146 死にはしない様なこと でも、わざと自分を傷つけ た(カミソリで自分を傷つ ける、死ぬということをは のめかすような行動)。	149 深刻な怪我をしたりす ることはなさそうなこと であるが、それを何度も繰 返す(皮膚を剥く、つねる)
<input type="checkbox"/>	143 意図的にはしなかつた ことで、自分を傷つけたこ とがある(本人はそれにど のような危険があったかわ かっていない)	147 自分を傷つける、自殺す る、または死にたいと何 度も言う	151 自傷があると思わせ る行動は見られない
	144 自分を傷つけようとい う意図がある、本当に死に たいと思っている		
	145 例外	148 例外	152 例外
説明：			153 得点化不可能

長所/目標：自傷行為下位尺度 (オプション：この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |                                   |                                |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| S/G 107 自己破壊的行動はない                | S/G 113 虐待されるのを拒否する            |
| S/G 108 自己破壊的なことは話さない             | S/G 114 性的に利用されるのを避けようとする      |
| S/G 109 自己破壊的行動をとりたくなったら誰かに助けを求める | S/G 115 安全な性行動をする(コンドームをする)    |
| S/G 110 自傷以外のコーピングをしようとする         | S/G 116 食事をきちんととる、必要最低限の食事はとる  |
| S/G 111 自己破壊的な感情を他のことに昇華させることができる | S/G 117 監督されていなくても、適切な体重を保っている |
| S/G 112 自分の身体を大切にしてい、傷つけない        | S/G 118 その他 ( )                |

子どもの名前:

ID番号

深刻な障害 深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている (30)	中程度の障害 かなりの または持続する障害 (20)	軽度の障害 問題視されるべきこと の存在 または心痛 (10)	最低限の障害が障害なし 機能に障害はない (0)
--	-------------------------------------	---	--------------------------------

全年齢の子ども対象

<p>物質使用 (アルコール・タバコ またはその 他の物質)</p> <p>154 物質を手に入れること と使用することが生活の中 心となっている(物質を使 うことで頭がいっぱいで ある、物質を使いたいと切望 している、朝から使用して いる)</p> <p>155 機能を保つためには物 質の使用が必要である(使 うことをやめたら、禁断症 状がでて、気分が悪くなる、 頭痛がする、吐き気、嘔吐、 震えなどが起こるであろう 場合)</p> <p>156 物質使用による効果が 原因で放校になる</p> <p>157 物質使用による効果が 原因で解雇される</p> <p>158 頻繁に泥酔状態である か、ハイである</p> <p>159 物質使用のために頻繁 によくないことが起こる (怪我をする、法を破る、 落第する、身体的病気にか かる)</p> <p>160 妊娠中または子どもが いるにも関わらず物質を使 用している</p> <p>161 妊娠中または子どもが いるにも関わらずよく泥酔 状態になる、アルコール使 用が頻回である</p> <p>162 アルコール飲用後記憶 喪失になったことがある、 一人で呑む、一度呑み始め たら止められない</p>	<p>165 機能(仕事、学校、運 転)に障害が出るような呑 みかたをする(交通法を破 る、学校を休む、遅刻する)、 または学校/仕事に行く前 に使用する</p> <p>166 使用が原因で問題 をおこす(口論になる、けん かをする、事故を起こす、 教師との間に問題が起こる、 警察に補導される、決まり 事をまもらない、門限を守 らない)</p> <p>167 使用によって自分また はまわりの人が危険な目 にあう(怪我をする、性的な 暴行を受ける)</p> <p>168 友達ほとんどが物質 を使用する</p> <p>169 一週間に一度は泥酔状 態になる、またはハイにな る</p>	<p>172 過度の使用は頻繁でな く、そのことが原因で問題 をおこすこともない</p> <p>173 使用は頻繁であるが、 泥酔まではいかない、ハイ になっているようにはみえ ない</p>	<p>176 物質使用はない</p> <p>177 使用を否定していて、 確かめようがない</p> <p>178 ちょっと試してみた だけで、本当には使ったこ とはない</p> <p>179 ごくたまに使うこと があるが、問題はおこさな い</p>
--	---	---	--

12歳以下の子ども対象

163 12歳以下で、よく呑む	170 12歳以下で使用する が、泥酔まではいかない、 ハイになっているようには みえない	174 12歳以下で、一度で も物質を使用したことがあ る
164 例外	171 例外	175 例外
説明:		180 例外
		181 得点化不可能

長所/目標: 物質使用下位尺度 (オプション: この尺度を評定することは CAFAS 評定に影響を与えない)

- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| S/G 119 物質を使用しない                | S/G 127 アルコール/物質の使用が行動に及ぼす悪い影響を理解している              |
| S/G 120 使用するが、過度には使わない          | S/G 128 物質使用に関する検査を拒否しない                           |
| S/G 121 使う必要はないと感じる             | S/G 129 物質を使用したいという気持ちになるような<br>ことが起こっても他の対処方法がある  |
| S/G 122 アルコール/物質の使用の悪い影響を理解している | S/G 130 物質を使用していない親または<br>親に代わる存在が子どもに物質使用について教育する |
| S/G 123 友達は物質を使わない              | S/G 131 物質使用に代わる社交的な活動に参加している                      |
| S/G 124 物質を使わない友達を意識して選ぶ        | S/G 132 その他 ( )                                    |
| S/G 125 物質を使う友達から離れようと努力している    |  |
| S/G 126 物質使用の治療中である             |  |

子どもの名前：		ID 番号	
深刻な障害	中程度の障害	軽度の障害	最低限の障害か障害なし
深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている	かなりの または持続する障害	問題視されるべきこと の存在 または心痛	機能に障害はない
(30)	(20)	(10)	(0)
以下のことが原因で、普通 学級の授業は受けられない、 普通の友人関係がない、地 域社会でも人と普通の関わり をもてない：	コミュニケーションをとる ことが頻繁に困難である、 または以下のことが原因で、 誰かに監督されている必要 がある：	以下のことが原因でコミュ ニケーションをとることが 難しいときがある：  193 風変わりな話し方をす る 194 考えの歪み（強迫や疑 い深さ） 195 風変わりな考え、8歳以 上なら普通では考えられな いような（マジックのよう な）ことが起こるという考 え 196 病的ではない風変わ りな知覚体験	198 コミュニケーション に反映されている考えが、 歪んでいない、エキセント リックではない
思考  <input type="checkbox"/>	182 考えや言語が理論的で はないことから、コミュニ ケーションが難しいまたは 不可能（連合弛緩、奔逸） 183 言語または非言語的な コミュニケーションが著し くおかしい（反響性言語模 倣、独特の言語をつかう 184 幻覚による奇妙な行動、 空想と現実を分けることが できない 185 短期的な記憶がよく失 われる、時間と場所に関す る失見当がある	187 コミュニケーションが 途切れる、関係のないこと が会話に入ってくる、体系 化されていない（同年齢の 子どもに比べて） 188 考えが歪んでいる 189 通常の生活が幻覚によ って中断させられる 190 よく混乱する、短期的 な記憶が失われる 191 空想で頭がいっぱいで ある（空想のテーマは奇妙 で、好ましくないものであ る） 192 例外	
186 例外		197 例外	199 例外
説明：			200 得点化不可能

長所/目標：思考下位尺度（オプション：この尺度を評定することはCAFAS評定に影響を与えない）

Strengths(S)/Goals(G) for Thinking Subscale

(OPTIONAL: UNNECESSARY FOR CAFAS RATING)

- |                                 |  |
|---------------------------------|--|
| S/G 133 ニーズを人に伝えることができる         | S/G 140 空想は年齢を考慮すると適当なものである                |
| S/G 134 自分を言いたいことを表現できる         | S/G 141 何かを考えただけではその事は起こらない<br>ということが理解できる |
| S/G 135 問題解決能力がある               | S/G 142 年齢に見合った自分の世話ができる                   |
| S/G 136 理論的に考えることができる           | S/G 143 薬を飲まなくてはいけないときはそれを理解できる            |
| S/G 137 自分が置かれている状況をしっかり把握できている | S/G 144 不適切な考えや感情、衝動をコントロールしようとする          |
| S/G 138 長期的な目標を設定できる            | S/G 145 その他（                               |
| S/G 139 幻覚や妄想がない                | ）  |

子どもの名前:

ID 番号

評定された養育者:

同居している実の親用	評定された養育者	子どもとの関係	情報源である人物	子どもの居住環境	評定者	日付	Adm#
	<b>深刻な障害</b> 深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている (30)	<b>中程度の障害</b> かなりの または持続する障害 (20)	<b>軽度の障害</b> 問題視されるべきことの存在 または心痛 (10)	<b>最低限の障害か障害なし</b> 機能に障害はない (0)			
親またはそれに代わる存在の物質的資源 <input type="checkbox"/>	201 子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされず、健康と福祉が危ぶまれている 202 例外	203 子どもの機能に頻繁な支障がきたされている、または、子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされていないため、子どもの機能に著しい障害が見られる 204 例外	205 子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされていないため、子どもの機能に障害が見られることがたまにある 206 例外	207 基本的な物質的ニーズは満たされており、子どもの機能に支障を及ぼしていない 208 地域社会にある資源を適宜使うことができる 209 例外 210 得点化不可能			
家族/社会サポート <input type="checkbox"/>	211 資源が足りないことで子どもが置かれている家庭、社会環境は子どもにとって危険なものである 212 親の判断力または機能に大きな問題がある(精神病性障害、物質使用、深刻な人格障害、発達遅滞からくるものが考えられる) 213 親または親に代わる存在が子どもに敵意を持っている、子どもに帰宅して欲しくないと考えている 214 親または親に代わる存在が子どもを性的に虐待している 215 親または親に代わる存在が子どもを身体的に虐待している、無関心である 216 親または親に代わる存在が、子どもが他に住める所を決めないで、家庭から追い出す 217 性的、身体的虐待、または親の無関心が原因で家庭以外のところに住んでいる 218 または親に代わる存在が以前に虐待を受けた子どもの安全が保証された環境を提供しない 219 頻繁な家庭内暴力 220 親または親に代わる存在が違法な活動をしている、子どもが違法な活動することを認める 221 例外	222 家族の資源より子どものニーズが多いので、子どもの発達上のニーズに適切に答えることができない 223 親または親に代わる存在の判断力にかなりの問題がある(感情の不安定さ、精神障害、物質使用、身体的病気、違法行為など) 224 家庭内での問題が絶えない(敵意、緊張、犠牲などが絶えない) 225 家族が子どものことを気にもしない、子どもに対して怒っている、子どもを憎んでいる 226 親または親に代わる存在による子どもの監督の著しい欠如(子どもがどこにいるのかわからないことがよくある、子どもの友だちが誰だかわからない) 227 心的外傷や虐待を受けた子どもに感情面でのサポートをしない 228 家庭内暴力、またはその脅しがある	230 子どもが必要とするものに対して、家庭の資源が少ないので、温かさ、気遣い、安全をあたえることができない。この不足を補うために家庭外の資源を利用することができない 231 口論や、誤解が多くおき、嫌な気持ちになることがある 232 家庭内での問題がうまく解決されない、コミュニケーションがうまくいかない、感情に対して気遣いが足りない 233 子どもが必要とするものに対して、家庭の資源が少ないので、監督したり、厳しくしつけたり、いつも世話をすることができない。この不足を補うために家庭外の資源を利用することができない	235 温かい家庭、安全を与えることができ、気持ちにも気遣いがされ、子どものほとんどのニーズは満たされている 236 親または親に代わる存在による監督は足りている 237 一時的な問題はあっても、不足している資源は家庭外の資源を利用することで補うことができる 238 例外 239 得点化不可能			
説明:							

長所/目標: 同居している実の親用 — 14 ページ参照

子どもの名前:

ID 番号

評定された養育者:

同居していない実の親用	評定された養育者	子どもとの関係	情報源である人物	子どもの居住環境	評定者	日付	Adm#
	<b>深刻な障害</b>	<b>中程度の障害</b>		<b>軽度の障害</b>			
	深刻な障害または存在する能力を 発揮することが障害されている (30)	かなりの または持続する障害 (20)		問題視されるべきことの存在 または心痛 (10)			最低限の障害が障害なし 機能に障害はない (0)
親またはそれに代わる存在の物質的資源 <input type="checkbox"/>	240 子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされておらず、健康と福祉が危ぶまれている	242 子どもの機能に頻繁な支障がきたされている、または、子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされていないため、子どもの機能に著しい障害が見られる		244 子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされていないため、子どもの機能に障害が見られることがたまにある			246 基本的な物質的ニーズは満たされており、子どもの機能に支障を及ぼしていない  247 地域社会にある資源を適宜使うことができる
	241 例外	243 例外		245 例外			248 例外
	説明:						249 得点化不可能
家族/社会サポート <input type="checkbox"/>	250 資源が足りないことで子どもが置かれている家庭、社会環境は子どもにとって危険なものである 251 親の判断力または機能に大きな問題がある(精神病性障害、物質使用、深刻な人格障害、発達遅滞からくるものが考えられる) 252 親または親に代わる存在が子どもに敵意を持っている、子どもを拒絶している、子どもに帰宅して欲しくないと考えている 253 親または親に代わる存在が子どもを性的に虐待している 254 親または親に代わる存在が子どもを身体的に虐待している、無関心である 255 親または親に代わる存在が、子どもが他に住める所を決めないで、家庭から追い出す 256 性的、身体的虐待、または親の無関心が原因で家庭以外のところに住んでいる 257 または親に代わる存在が以前に虐待を受けた子どもの安全が保証された環境を提供しない 258 頻繁な家庭内暴力 259 親または親に代わる存在が違法な活動をしている、子どもが違法な活動することを認める	261 家族の資源より子どものニーズが多いので、子どもの発達上のニーズに適切に答えることができない 262 親または親に代わる存在の判断力にかなりの問題がある(感情の不安定さ、精神障害、物質使用、身体的病気、違法行為など) 263 家庭内での問題が絶えない(敵意、緊張、犠牲などが絶えない) 264 家族が子どものことを気にもしない、子どもに対して怒っている、子どもを憎んでいる 265 親または親に代わる存在による子どもの監督の著しい欠如(子どもがどこにいるのかわからないことがよくある、子どもの友だちが誰だかわからない) 266 心的外傷や虐待を受けた子どもに感情面でのサポートをしない 267 家庭内暴力、またはその脅しがある		269 子どもが必要とするものに対して、家庭の資源が少ないので、温かさ、気遣い、安全をあたえることができない。この不足を補うために家庭外の資源を利用することができない 270 口論や、誤解が多くおき、嫌な気持ちになることがある 271 家庭内での問題がうまく解決されない、コミュニケーションがうまくいかない、感情に対して気遣いが足りない 272 子どもが必要とするものに対して、家庭の資源が少ないので、監督したり、厳しくしつけたり、いつも世話をすることができない。この不足を補うために家庭外の資源を利用することができない			274 温かい家庭、安全を与えることができ、気持ちにも気遣いがされ、子どものほとんどのニーズは満たされている 275 親または親に代わる存在による監督は足りている 276 一時的な問題はあっても、不足している資源は家庭外の資源を利用することで補うことができる
	260 例外	229 例外		273 例外			277 例外
	説明:						278 得点化不可能

長所/目標: 同居していない実の親用 — 14 ページ参照

子どもの名前:

ID 番号

評定された養育者:

血縁ではない親代わり用	評定された養育者	子どもとの関係	情報源である人物	子どもの居住環境	評定者	日付	Adm#
	<b>深刻な障害</b>	<b>中程度の障害</b>	<b>軽度の障害</b>	<b>最低限の障害か障害なし</b>			
	深刻な障害または存在する能力を発揮することが障害されている (30)	かなりのまたは持続する障害 (20)	問題視されるべきことの存在 または心痛 (10)	機能に障害はない (0)			
親またはそれに代わる存在の物質的資源 <input type="checkbox"/>	279 子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされておらず、健康と福祉が危ぶまれている	281 子どもの機能に頻繁な支障がきたされている、または、子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされていないため、子どもの機能に著しい障害が見られる	283 子どもの衣食住、医療、安全のニーズが満たされていないため、子どもの機能に障害が見られることがたまにある	285 基本的な物質的ニーズは満たされており、子どもの機能に支障を及ぼしていない  286 地域社会にある資源を適宜使うことができる			
	280 例外	282 例外	284 例外	287 例外 288 得点化不可能			
家族/社会サポート <input type="checkbox"/>	289 資源が足りないことで子どもが置かれている家庭、社会環境は子どもにとって危険なものである 290 親の判断力または機能に大きな問題がある(精神病性障害、物質使用、深刻な人格障害、発達遅滞からくるものが考えられる) 291 親または親に代わる存在が子どもに敵意を持っている、子どもを拒絶している、子どもに帰宅して欲しくないと考えている 292 親または親に代わる存在が子どもを性的に虐待している 293 親または親に代わる存在が子どもを身体的に虐待している、無関心である 294 親または親に代わる存在が、子どもが他に住める所を決めないで、家庭から追い出す 295 性的、身体的虐待、または親の無関心が原因で家庭以外のところに住んでいる 296 または親に代わる存在が以前に虐待を受けた子どもの安全が保証された環境を提供しない 297 頻繁な家庭内暴力 298 親または親に代わる存在が違法な活動をしている、子どもが違法な活動することを認める	300 家族の資源より子どものニーズが多いので、子どもの発達上のニーズに適切に答えることができない 301 親または親に代わる存在の判断力にかなりの問題がある(感情の不安定性、精神障害、物質使用、身体的病氣、違法行為など) 302 家庭内での問題が絶えない(敵意、緊張、犠牲などが絶えない) 303 家族が子どものことを気にもしない、子どもに対して怒っている、子どもを憎んでいる 304 親または親に代わる存在による子どもの監督の著しい欠如(子どもがどこにいるのか知らないことがよくある、子どもの友だちが誰だか知らない) 305 心的外傷や虐待を受けた子どもに感情面でのサポートをしない 306 家庭内暴力、またはその脅しがある	308 子どもが必要とするものに対して、家庭の資源が少ないので、温かさ、気遣い、安全をあたえることができない。この不足を補うために家庭外の資源を利用することができない 309 口論や、誤解が多くおき、嫌な気持ちになることがある 310 家庭内での問題がうまく解決されない、コミュニケーションがうまくない、感情に対して気遣いが足りない 311 子どもが必要とするものに対して、家庭の資源が少ないので、監督したり、厳しくしつづれたり、いつも世話をすることができない。この不足を補うために家庭外の資源を利用することができない	313 温かい家庭、安全を与えることができ、気持ちにも気遣いがされ、子どものほとんどのニーズは満たされている 314 親または親に代わる存在による監督は足りている 315 一時的な問題はあっても、不足している資源は家庭外の資源を利用することで補うことができる			
	299 例外	307 例外	234 例外	316 例外 317 得点化不可能			
	説明:						

長所/目標: 血縁ではない親代わり用 — 14 ページ参照

長所/目標：同居している実の親用（オプション：この尺度を評価することはCAFAS 評定に影響を与えない）

- |  |  |
|--|--|
| S/G 146 安定した家庭環境を提供する                            | S/G 159 子どもが助けを必要としていることが分かる                   |
| S/G 147 明確にコミュニケーションをとる                          | S/G 160 自分の問題解決方がうまく行かないとき、<br>誰かに助けを求めることができる |
| S/G 148 家庭以外の資源を使う努力をする                          | S/G 161 子どもの行動がよくなくても、愛情をもって接している              |
| S/G 149 子どもが自分の文化活動に参加することを奨励する                  | S/G 162 子どもに刺激されたときでも、親が自分をコントロールする            |
| S/G 150 よい行動を奨励し、よくない行動は無視する                     | S/G 163 自分の問題が子どもに与える影響を<br>できるだけ少なくするように努力する  |
| S/G 151 どのような行動をとるべきか、<br>どのような価値を大切にしているか明確に伝える | S/G 164 家族の問題が子どもに与える影響を<br>できるだけ少なくするように努力する  |
| S/G 152 日常生活がある                                  | S/G 165 子どもに対する接し方が一貫している                      |
| S/G 153 子どもの年齢にあったゴールを設定している                     | S/G 166 家庭内暴力はない                               |
| S/G 154 家族で食事をする                                 | S/G 167 自分の問題に関する助けを誰か、どこかに求める                 |
| S/G 155 家族で問題について話し合う                            | S/G 168 物質使用がある場合はそのことに対して助けを得ている              |
| S/G 156 社会的な行動や話し方のモデルを示す                        | S/G 169 その他（ ）                                 |
| S/G 157 問題解決のモデルを示す                              |  |
| S/G 158 虐待されたことのある子どもに感情面でのサポートをする               |  |

長所/目標：同居していない実の親用（オプション：この尺度を評価することはCAFAS 評定に影響を与えない）

- |  |  |
|--|--|
| S/G 170 安定し家庭環境を提供する                             | S/G 183 子どもが助けを必要としていることが分かる                   |
| S/G 171 明確にコミュニケーションをとる                          | S/G 184 自分の問題解決方がうまく行かないとき、<br>誰かに助けを求めることができる |
| S/G 172 家庭以外の資源を使う努力をする                          | S/G 185 子どもの行動がよくなくても、愛情をもって接している              |
| S/G 173 子どもが自分の文化活動に参加することを奨励する                  | S/G 186 子どもに刺激されたときでも自分をコントロールする               |
| S/G 174 よい行動を奨励し、よくない行動は無視する                     | S/G 187 自分の問題が子どもに与える影響を<br>できるだけ少なくするように努力する  |
| S/G 175 どのような行動をとるべきか、<br>どのような価値を大切にしているか明確に伝える | S/G 188 家族の問題が子どもに与える影響を<br>できるだけ少なくするように努力する  |
| S/G 176 日常生活がある                                  | S/G 189 子どもに対する接し方が一貫している                      |
| S/G 177 子どもの年齢にあったゴールを設定してい                      | S/G 190 家庭内暴力はない                               |
| S/G 178 家族で食事をする                                 | S/G 191 自分の問題に関する助けを誰か、どこかに求める                 |
| S/G 179 家族で問題についてはなしあう                           | S/G 192 物質使用がある場合はそのことに対して助けを得ている              |
| S/G 180 社会的な行動や話し方のモデルをしめす                       | S/G 193 その他（ ）                                 |
| S/G 181 問題解決のモデルを示す                              |  |
| S/G 182 虐待されたことのある子どもに感情面でのサポートをする               |  |

長所/目標：血縁ではない親代わり用（オプション：この尺度を評価することはCAFAS 評定に影響を与えない）

- |  |  |
|--|--|
| S/G 194 安定し家庭環境を提供する                             | S/G 207 子どもが助けを必要としていることが分かる                   |
| S/G 195 明確にコミュニケーションをとる                          | S/G 208 自分の問題解決方がうまく行かないとき、<br>誰かに助けを求めることができる |
| S/G 196 家庭以外の資源を使う努力をする                          | S/G 209 子どもの行動がよくなくても、愛情をもって接している              |
| S/G 197 子どもが自分の文化活動に参加することを奨励する                  | S/G 210 子どもに刺激されたときでも自分をコントロールする               |
| S/G 198 よい行動を奨励し、よくない行動は無視する                     | S/G 211 自分の問題が子どもに与える影響を<br>できるだけ少なくするように努力する  |
| S/G 199 どのような行動をとるべきか、<br>どのような価値を大切にしているか明確に伝える | S/G 212 家族の問題が子どもに与える影響を<br>できるだけ少なくするように努力する  |
| S/G 200 日常生活がある                                  | S/G 213 子どもに対する接し方が一貫している                      |
| S/G 201 子どもの年齢にあったゴールを設定してい                      | S/G 214 家庭内暴力はない                               |
| S/G 202 家族で食事をする                                 | S/G 215 自分の問題に関する助けを誰か、どこかに求める                 |
| S/G 203 家族で問題についてはなしあう                           | S/G 216 物質使用がある場合はそのことに対して助けを得ている              |
| S/G 204 社会的な行動や話し方のモデルをしめす                       | S/G 217 その他（ ）                                 |
| S/G 205 問題解決のモデルを示す                              |  |
| S/G 206 虐待されたことのある子どもに感情面でのサポートをする               |  |

オプション：治療計画

インストラクション：関りのある尺度名を記入すること。問題点、目標、長所のセクションに関係のある CAFAS 項目番号を書き込み、問題の詳細について記載すること（例：1月5日、学校にナイフを持っていったので放校になった）。計画のセクションには具体的な治療計画を書き込む。

尺度 \_\_\_\_\_

項目 #		記 述
問題点		
目標		
長所		
計画		

尺度 \_\_\_\_\_

項目 #		記 述
問題点		
目標		
長所		
計画		

尺度 \_\_\_\_\_

項目 #		記 述
問題点		
目標		
長所		
計画		



尺度 \_\_\_\_\_

項目 #		記 述
問題点		
目標		
長所		
計画		

尺度 \_\_\_\_\_

項目 #		記 述
問題点		
目標		
長所		
計画		

尺度 \_\_\_\_\_

項目 #		記 述
問題点		
目標		
長所		
計画		

日 付

署 名

タイトル

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	書籍名	出版社名	出版地	出版年
菅原ますみ	個性はどう育つか	大修館書店	東京	2003年

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
菅原ますみ 八木下暁子 詫摩紀子 小泉智恵 瀬地山葉矢 菅原健介 北村俊則	夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連-家族機能および両親の養育態度を媒介として-	教育心理学研究	第50巻2号	129-140	2002年
酒井厚 菅原ますみ 菅原健介 木島伸彦 真栄城和美 詫摩武俊 天羽幸子	子どもによる親への対人的信頼感：児童・思春期の双生児を対象とした人間行動遺伝学的検討	発達心理学研究	第14巻2号	191-200	2003年
Masumi Sugawara	Maternal Employment and Child Development in Japan : A Twelve-Year Longitudinal Study	Applied Developmental Psychology Supplement	(in press)		

## 目 次

I. 総合研究報告	
* 総合研究報告書	
:子どもの不適応的行動の発達に関する発達精神病理学的検討	
菅原ますみ-----	357
II. 研究成果の刊行に関する一覧表	----- 361

平成15年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

子どもの不適応行動に関する発達精神病理学的検討

主任研究者 菅原ますみ お茶の水女子大学・大学院人間文化研究科・助教授

研究要旨 本研究では、近年頻発する子どもの不適応行動の出現を予防していくためには、①早期での的確な病態の把握と、②発現や問題進行を防ぐ要因（防御因子）の有効利用が必要であると考え、精神病理に関する包括的評価尺度の開発と不適応行動の発達に関する縦断的な実証研究を実施した。2年間の研究期間中に、児童・思春期の子どもを対象とした精神科診断面接尺度と社会的機能障害尺度の2尺度の作成と、非行系の問題行動や引き込み、不登校などの不適応的行動の発現に関連する諸要因と発達メカニズムに関する基礎的解析をおこなった。

A. 研究目的

子どもたちの不適応的行動の発現を防ぐためには本邦においても発達的な観点からの基礎的研究が必要である。本研究平成14年度と15年度の2年間の研究期間中以下の2点を目的とした3つの研究プロジェクトを展開した：

1) 児童・思春期の不適応行動の適切な評価と分類 2) 発現に関連する危険因子と防御因子を同定するための一般人口中の乳児～青年を対象としたプロスペクティブな研究（縦断研究）によって不適応行動の発達過程を実証的に解明する。

プロジェクト1は児童精神科受診の症例群を対象とした臨床研究、プロジェクト2は大規模双生児研究、プロジェクト3は一般人口中の児童を対象とした出生前より青年期までの19年間にわたる長期縦断研究である。

B. 研究方法

\*解析パラダイム：1990年代以降に発達研究の1領域として確立したDevelopmental Psychology (Sroufe & Rutter, 1984; Cicchetti & Cohen, 1995; Cummings et al., 2000) では、不適応行動の発達の起源・発達のコース・メカニズ

ムの解明を目的として、乳児期から老人期までのライフスパンを対象とした発生的視点での検討を可能とする方法論を開発してきている。一般サンプルを対象とした問題発生以前からの縦断的研究と、そこで得られるデータの多変量解析を通じて、因果関係の推定やリスク群における防御過程の発見や新たなリスクパターンの検討が可能になった。本研究の3つのプロジェクトはすべて縦断的研究であり、かつ主要測定尺度を共有することによって、こうした発達精神病理学的解析パラダイムによる総合的な検討を可能にするように計画された。

\*対象者：\*プロジェクト1→名古屋大学医学部附属病院児童精神科（現 親と子の心療部）を受診した6～15歳までの子どもとその親。面接群84名、アンケート群615名。

\*プロジェクト2→ツインマザースクラブの協力を得て、0～17歳までの一卵性および二卵性双生児2,135組が縦断研究に登録された。同意の得られた家庭について、両親のパーソナリティ測定を含んだ家族調査（父親版、母親版、双生児のふたりに対する子ども版、約700家庭から回答を収集）を実施し、パーソナリティとの関連が予想される多型遺伝子の解析を実施する。

\*プロジェクト3→1984年に開始された妊娠期よりの縦断研究のサンプルのうち、中学生期までの12回にわたる追跡調査のデータが揃っている277世帯の家族のデータを平成14年度の解析対象とした。また、平成15年度には青年期の追跡調査（生後19年目）を実施した（有効回答数：父親版220、母親版273、青年本人版257）。18歳時点までの引きこもり、非行、不登校などの不適応的体験の有無を測定し、先行する関連諸要因の分析を開始した。

\*測定尺度：プロジェクト1→プライマリケア時の包括的評価尺度セットの開発をめざし、児童・思春期の子どもに適用可能な精神科構造化面接尺度および社会的適応評価尺度（機能障害尺度）の開発をおこなった（平成14年度および平成15年度の研究報告書に添付）。この2尺度の他に、各疾患別症状スクリーニング尺度・知能検査・学習障害スクリーニング検査などをテストバッテリーとして構成したうえで、受診した対象者に実施した。テスターは組織的なトレーニングを受けた大学院生および言語療法士、精神科医師である。縦断研究に承諾した対象者についてはプロジェクト2・3で使用している家庭環境や家族関係、学校適応などの社会心理的諸変数についても質問紙によって測定をおこなった。プロジェクト2→子どもの問題行動と精神症状の包括的尺度である Child Behavior Checklist (Achenbach, 1991)、パーソナリティ尺度 (Cloninger, 1996)、親の精神的健康度などの環境要因に関する心理社会的

諸変数について郵送による質問紙法によって測定した。プロジェクト3→プロジェクト2と同様な諸変数を妊娠より継続して測定してきている。

#### <倫理面への配慮>

すべての研究において、対象者となった家族の保護者および子ども本人に研究の目的と方法、また匿名性の確保や研究参加や離脱の自由などの倫理的配慮に関する説明をおこない、承諾の得られた者については研究同意書に自署してもらった。

#### C. 研究結果および考察

\*プロジェクト1：平成14年度には児童・思春期を対象とした研究用の構造化面接尺度 Child Assessment Scale (CAS, Hodges, 1994) を DSM-IV 診断が可能になるように改変し臨床群に適用した。また CAS の結果から主要諸疾患の診断を付与するためのコンピューターアルゴリズム (SPSS 用) を開発した。これらを用いた疾患分類の妥当性についての検討が今後の課題である。平成15年度には学校・家庭・地域などの領域ごとの社会的適応度を評価する Child and Adolescent Functional Assessment Scale (CAFAS, Hodges, 1996) を開発し、児童精神科臨床サンプルに関する研究（面接84サンプル、質問紙615サンプル）では、広範囲な子どもの精神疾患の診断および社会適応に関する面接尺度と疾患ごとの各種質問紙尺度、および医師の臨床診断も含めて網羅的に検討された。その結果、プライマリ

ケア時の総括的な症状や適応状態の評価の重要性が示され、体系的で具体的な実施策の検討が今後の課題であることが明らかになった。

\*プロジェクト2：乳児期～中学生期まで年齢段階ごとにパーソナリティおよび問題行動傾向に関する単変量遺伝解析を実施した。その結果、どの年齢段階においてもパーソナリティはAE（遺伝・非共有環境）モデルが該当したのに対し、非行系問題行動（externalizing problems:EP）は遺伝A54%・共有環境C21%・非共有環境E25%、ひきこもり系（internalizing problems）は遺伝19%・共有環境49%・非共有環境32%といずれもACEモデルが採用されることになり、問題行動や精神症状の発達に関わる共有環境要因の存在が示される結果となった。

\*プロジェクト3：長期縦断サンプルについて、思春期（14歳時点）までの質問紙調査および家族コミュニケーションの解析を実施した。その結果、児童・思春期の問題行動及び精神症状の発現には家族関係を中心とした家庭環境要因が大きく関わることが明らかになった。非行系問題行動（EP）と親要因との縦断的関連について乳児期より中学生期まで解析したところ、両者の影響関係は年齢段階によって異なること、発達の起源は親要因に先立つ子どもの萌芽的EP傾向にあることなどが明らかになった。

青年期の追跡調査では、引きこもり体験者が2.4%、不登校体験者が11.4%で存在していることがわかった。これらの不適応行動に非行体験を含めて3種類の問題行動の発現に関する先行関連要因について検討したところ、幼少期よりの本人の気質的行動特徴や問題行動傾向の関連が示された。

#### D. 結論

本研究より、子どもの不適応行動の発現には多様な環境要因が関与しており、それらは生物学的背景を有する子ども自身の行動特徴と発達早期から相互に影響し合っ  
て不適応行動の発達に関わることが実証的に示された。またこうした発達メカニズムは非行系の問題行動とひきこもり系の問題行動では関連する要因や発達プロセスが異なることが示唆され、今後それぞれに詳細な解析が必要であることが明らかになった。

#### E. 研究発表

##### <論文発表>

菅原 ますみ、八木下 暁子、詫摩紀子、他  
夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連-家族機能および両親の養育態度を媒介として-。教育心理学研究 50: 129-140, 2002.

菅原ますみ 前方向視的研究からみた小児期の行動異常のリスクファクター：発達精神病理学的研究から。精神保健研究印刷中, 2004.

Sugawara, M. Maternal Employment and Child Development in Japan: A Twelve-Year Longitudinal Study.

Applied Developmental Psych, in press, 2004

Honjo, S., Sasaki, Y., Kaneko, H., et al.

A study on feelings of school avoidance, depression, and character tendencies among general junior high and high school students. Psychiatry and Clinical Neurosciences, 57(5):464-71, 2003.

野呂健二・本城秀次 小児・思春期精神医学 (12) 軽度発達障害と10歳の壁。精神科, 2(6)(通号 12): 535-537 2003

Suo, S., Sasagawa, N., Ishiura, S.

Identification of a dopamine receptor from *Caenorhabditis elegans*.

Neurosci.Lett. 319:13-16, 2002.

酒井 厚、菅原 ますみ、眞榮城 和美、他  
児童・思春期で経験するネガティブ・ラ  
イフイベント:子どもの抑うつ傾向の悪  
化を防ぐ親・きょうだいへの対人的信頼  
感. 精神保健研究(15), 71-83, 2002

酒井 厚、菅原 ますみ、眞榮城 和美、他  
中学生の親および親友との信頼関係と学  
校適応. 教育心理学研究 50, 12-22 2002

酒井 厚、宇野 彰、細金 奈奈、他 症 例  
カタカナと漢字に関する発達性読み書き  
障害の1症例--認知神経心理学的分析.  
小児の精神と神経, 42, 333-338, 2002

酒井 厚、菅原 ますみ、菅原 健介、他  
子どもによる親への対人的信頼感:児  
童・思春期の双生児を対象とした人間行  
動遺伝学的検討. 発達心理学研究 14,  
191-200, 2003

金子 一史、本城 秀次、高村 咲子  
自己関係づけと対人恐怖心性・抑うつ・  
登校拒否傾向との関連. パーソナリティ  
研究, 12,, 2-13, 2003

F. 財産権の出願・登録状況

: なし

G. その他

: なし

## II. 研究成果の刊行に関する一覧表

### 書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
菅原ますみ	個性はどう育つか	菅原ますみ (単著)	個性はどう育つか	大修館書店	東京	2003	1-223
菅原ますみ	母親の就労は子どもの問題行動を生むか-3歳児神話の検証-	柏木恵子・高橋恵子編	心理学とジェンダー	ミネルヴァ書房	京都	2003	11-16

### 雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
菅原 ますみ、八木下 暁子、詫摩 紀子、他	夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連-家族機能および両親の養育態度を媒介として-	教育心理学研究	50	129-140	2002
菅原ますみ	前方向視的研究からみた小児期の行動異常のリスクファクター：発達精神病理学的研究から。	精神保健研究			印刷中, 2004
Sugawara, M.	Maternal Employment and Child Development in Japan: A Twelve-Year Longitudinal Study.	Applied Developmental Psychology			in press, 2004
Honjo, S., Sasaki, Y., Kaneko, H., et al.	A study on feelings of school avoidance, depression, and character tendencies among general junior high and high school students.	Psychiatry and Clinical Neurosciences	57(5)	464-71	2003
野邑健二・本城秀次	小児・思春期精神医学(12) 軽度発達障害と10歳の壁。	精神科	2(6)(通号12)	535-537	2003
Suo, S., Sasagawa, N., Ishiura, S.	Identification of a dopamine receptor from <i>Caenorhabditis elegans</i> .	Neurosci. Lett	319	13-16	2002
酒井 厚、菅原 ますみ、眞榮城 和美、他	児童・思春期で経験するネガティブ・ライフイベント:子どもの抑うつ傾向の悪化を防ぐ親・きょうだいへの对人的信頼感。	精神保健研究	15	71-83	2002



酒井 厚、菅原 ま すみ、眞榮城 和 美、他	中学生の親および親友 との信頼関係と学校適 応.	教育心理学研 究	50	12-22	2002
酒井 厚、宇野 彰、細金 奈奈、 他	症例 カタカナと漢字 に関する発達性読み書 き障害の1症例--認知 神経心理学的分析.	小児の精神と 神経	42	333-338	2002
酒井 厚、菅原 ま すみ、菅原 健介、 他	子どもによる親への対 人的信頼感:児童・思春 期の双生児を対象とし た人間行動遺伝学的検 討.	発達心理学研 究	14	191-200	2003
金子 一史、本城 秀次、高村 咲子	自己関係づけと対人恐 怖心性・抑うつ・登校 拒否傾向との関連.	パーソナリテ ィ研究	12	2-13	2003